
幼馴染

龍田未華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染

【Zコード】

Z29290

【作者名】

龍田未華

【あらすじ】

逸姫には子どもの頃の記憶がない。
いつの間にか、自分は孤児院にいた。
けれど、そのことで寂しさを感じたことは一度もない。
甘くて優しい恋人がいたから。

だが、ある日恋人は突然姿を消してしまつ。
傷つく逸姫だが、ある出会いにより、思いがけない真実を知る。そこには恋人とのある秘密が隠されていた。

恋人の深い愛情に気づいたとき、逸姫は？

(現在の過去編は「らぶらぶ甘々で若干バカップルになつてあります）

登場人物紹介

【登場人物紹介】

来嶋逸姫きじまいつき：22歳。服飾店に勤める。孤児院出身。子どもの頃の記憶がない。蓮也と結婚の約束をするが・・・

神瀬蓮也かみせはすや：23歳。孤児院出身。難関の医大に合格する程の秀才。突然失踪してしまつ。

落合胡桃おちあいくるみ：20歳。逸姫の同僚。ふんわりとした雰囲気の子。惚れやすく、失恋ばかりしている。

島谷雪乃しまだにゆきの：24歳。逸姫の同僚。姉御肌。

東條奏とうじょうそう：17歳。胡桃の想い人。

思いつきで書いていくので、その度に登場人物紹介枠が増えていくかと思います。

プロローグ

「逸姫ー」「めんー」

そう言いながら、走つてくる男を逸姫はベンチに座つたまま静かに見つめる。

「遅い」

「「めん、怒つた?」

「怒つた」

「じゃあアイスねーひてあげる」

「こりないわよー」「んな寒い日でー」

誰がこんな日にアイスなど冷たいものを食べたいものか。

辺り一面は銀世界。

街も木々もすべてに雪化粧が施されている。

地面は雪が高く降り積もり、吐き出す息は白く冷たい。

そんな日に外でアイスをもらつても嫌がらせ以外の何物でもない。

逸姫が睨むと、蓮也は飄々とした笑みを浮かべた。

「本当にこりないの?」

「こーむかー」

「じゃあ何もなしね」

「ちよつとーそれが狙いだつたの?ー」

最初からおいらいたくなくてやつたのか。
こつちは寒い中待つていたところに、なんてケチ臭い男だらう。

「今、ケチ臭いって思つたでしょ?」

蓮也がここにこしながら、思つたことを言つて聞かせる。
だが、そんなことではつむ逸姫じやない。

「実際ケチでしょ。可愛い彼女が寒空の下待つてたつてこいつの

ずずすつと鼻をすする。

すると、蓮也が手袋をした手で逸姫の頬を包んだ。
そして、こつん、とおでこを合わせてくれる。

「『い』めんね? 寒かつた?」

「……平氣」

本当に蓮也が申し訳ないと思つてこるのが、瞳を通して伝わつてくる。

そのため逸姫はすぐに蓮也を許してしまつ。
いつもはもうじばらく膨れている逸姫だが、
今回簡単に許したのには他にも理由があつた。

「院長先生と何のお話してきたの？」

逸姫はこのことがずっと聞きたくて仕方がなかつたのだ。
それなのに、蓮也はとぼけたような顔。

「ん？」

「進路、どうするの？」

院長先生とは、私たちを育てくれた孤児院の先生のことだ。
ひだまりのように優しい、私たちにとつてはお母さんとも言える存在。

この人がいたから、逸姫たちは寂しい思いをせずに済んでいる。

そして今の時期、逸姫たち年長者は進路を院長先生に必ず伝えることになつていて。

何故なら、この孤児院では、18歳になれば必ず出て行く決まりだから。

そうでなければ、後から孤児の子が入つてこれないのだ。

そして、逸姫も蓮也も来年で18になる。
出て行かねばならない時が迫っていた。
もうそろそろ進路を決めなくてはいけない。

この時期は誰もが憂鬱な気分になる。

血の繋がつた家族のいない者にとって孤児院のみんなは家族同然だ。
そのみんなと離れなければならぬのだから当然だろう。

それもこれからは何でも一人でやつていかなくてはいけない。

その不安も憂鬱な要素のひとつだった。

逸姫自身、不安でたまらない。

だから…

せめて、蓮也が傍にいてくれたら、と逸姫は思つ。

しかし、蓮也が逸姫に進路を教えてくれることはなかつた。
今も蓮也は逸姫に微笑むだけで、何も答えてくれようとしない。
蓮也の未来に逸姫は既にいないのかもしれない。

逸姫は軽く失望した。

「逸姫は？逸姫は進路どつするの？」

「私？……私は、そのへんで就職する」

逸姫は雪に埋まつた足元を見た。

「そつか、早く就職決まるといいね」

「うん…」

逸姫はそのまま灰色の雪を見つめ続ける。

「俺ね…逸姫に言つておきたいことがあるんだ」

その声は低く、どこか硬質だつた。

逸姫は隣に座る蓮也を仰ぎ見る。

だが、蓮也のほうは逸姫のことなど見ておらず、どこか遠くを見据えている。

その表情は、元気なく哀愁を帯びているよいつにも見えた。

やはり別れ話だらうか？

「なに？」

その声が震えていたからか、そこで初めて蓮也は逸姫のほつを振り向いた。

「逸姫……」

「うそ……」

逸姫は蓮也の田を見る興味がなくて、白い息が出てこる蓮也の口を見つめる。

「俺、医大受かったんだ」

「え？？」

逸姫は勢いよく顔を上げる。

「だから、俺は医者になる」

おやじくその時の逸姫は驚きで田を丸くしてたに違いない。

「医者って、蓮也が子どもの頃夢だつて言つてた？」

「やうやく

「でも、でも、そんな」と呟いたのはすうと前の口で、ただの夢だとばかり…」

「あの時から、諦めてなかつたんだ」

ל'ז

逸姫が蓮也の瞳を見ると嘘など言つていないうちにことがわかる。追つて、じわじわと逸姫の胸に感情が湧きあがつてくる。

「すこし！」

逸姫はベンチから立ち上ると蓮也に抱きついた。

「ありがとう」

蓮也も、嬉しそうに笑っている。

それを見ると逸姫まで嬉しくてたまなくなつた。

「蓮也、だから、よく深夜まで勉強してたのね？」

「そうだよ。ずっと、黙つててごめんね？もし合格しなかつたらと思つと、恥ずかしくて言えなくて」

「そんなの、全然恥ずかしくなんかないのにーでも、実現しかねつ蓮也は本当にすげことは思ひたゞ」

「そんなことないよ

「それにしてもひどい！あんな哀しそう顔して言つから、誤解しちやつたじゃない！」

「いりめん、驚かせたくて」

そう言って笑う蓮やは年相応の少年に見えた。

「あとね、もう一つ、逸姫に言つておくことがあるんだ」

「な、なに？」

まさか、今度こそ本当の本当に別れ話！？

逸姫が思わず身構えると蓮やは逸姫の前に膝まづいた。思いがけず真摯な瞳に出会って、逸姫はびきりとする。

「大学を卒業したら……俺と結婚してください」

蓮也の手には小さな小さなダイヤがついた指輪。

見るからに高価な物ではない。

ましてや、誰かが羨むような物でもなかつた。
けれど…

「はい…喜んで」

逸姫の瞳から一粒の涙が流れ落ちた。

雪に照らされたダイヤは今まで見た中で、一番美しかつた。

惚れやすい女＝落合胡桃

雪がぱらりぱらりと夜空に舞ひ。

街の灯りに照らされ、まるで童話の世界のよつだ、と逸姫は思ひ。

白い煙がそれじさいなる色を添えてこる。

あたかも自分がスノーデームの中に佇んでいるよつて思える。

幻想的な美しさに思わず見入ってしまひ。

「逸姫
！」

オーナーの呼ぶ声だ。

「はーーー今行きますーーー！」

(しまつた。まだ仕事の途中だった。)

逸姫は「みを捨てる」と、急いで暖かい店内へと戻る。

あれから5年の月日が流れ、逸姫は22歳になつた。

現在は服飾店で働いている。

あれほど不安だったのが嘘のよつに毎日がとても充実している。
服を仕立てるのは大変だが、すごく楽しい。

加えて、優しい店長に、気のおける同僚たちと人間関係にも恵まれ
ていた。

これ以上ない環境だ。

不満な要素は何もない。

「逸姫ちゃん、一緒に帰ろ?」

同僚の胡桃ちゃんくるみちゃんが鞄を持って立っていた。

私は、ちょっと待つて、と返事をかえすと、急ぎ帰り支度をして
胡桃ちゃんのもとへと駆ける。

胡桃ちゃんは私より少し年下で、ふんわりとした雰囲気をもつた女
の子だ。

とても優しく、孤児院出身の私に対しても見下した態度を取つたり
しない。

ただちょっと惚れっぽいのが玉に傷だけれど、それ以外に欠点らしい
ところは見当たらない、気配り上手の可愛らしい女の子。
胡桃ちゃんとはお店で一番、仲が良かつた。

「ねえ、ねえ、逸姫ちゃん！」

「なあに？」

「あのね、この前お店番してた時にすつしょくべ素敵な人がいたの…」
……またですか。

「逸姫ちゃんにも会わせてあげたかった。何ていうのかなあ、優しい王子様みたいな人なの」

……貴女は人生で何人の王子様に会っているのですか。お姫様でもそんなに会わないって。

「でね、でね、胡桃、その人のこと好きになっちゃったみたいなの」

……でしょう。

「だから、ね？協力して？」

私は女だから、貴女のうるうる上目遣いは通用しません！

だが、胡桃ちゃんは案外しぶとい。

「逸姫ちゃん、お願い！今度こそ、間違いなく運命の人なの！」

そんな安い運命があるか！

これは一回、がつん、と言ひてやらねば。

「胡桃ちゃん、そう言って、この前も失恋してたよね？」

「う…でも、誰にも迷惑」

「かけてないからいいじゃない、とか言いつつ、二つも人の家で大泣きして、やけ食いしてくよね？」

「「め…だ、だけど、こつもじや」

「そんでもって、毎回いい様に遊ばれて、貢がされた拳句、捨てられてるよね？」

「…、今度の人は優しそうな人だから、大丈夫！」

「貢いだ男も顔だけは優しそうだったよね？」

「……………そうだっけ？」

この娘は。

「そうだったでしょー！もう！毎回、顔だけ男にひつかつて、痛い目見てるのにまだわかんないの…？」

「いやあ…逸姫ちゃん、髪の毛ぐしゃぐしゃにしないでえー…」

私は胡桃ちゃんの頭をぐりぐりとかき回す。

それでもしないと、自分の気が收まらなかつた。

胡桃ちゃんは涙田で自分の頭を直している。
その姿に反省の色はあまりない。

まつたく、もつー。

いつか変な男に売られても知らないからね！

私は怒りのせいか、少々速足でずかずかと前を歩く。

「わかつたら、その男の人は諦めなさい。胡桃ちゃんは男を見る目
ないから、私が今度いい友達紹介してあげる」

「……や」

いやつ。

私が振り返ると、胡桃ちゃんはびくっと体を竦ませ、頭を手でおさ
えた。

どうやら、またぐりぐりされると思つたらしい。

その予想は概ね当たつていたが。
ちひ。

……まあ、でも。

どひせすぐには他の人好きになるだらひじ。

「 もひ勝手にすれば？」

胡桃ちゃんは惚れやすいが、熱が冷めるのもまた早い。

だからこそ、たいした被害もなく、今まで無事だったとも言える。

諦めにも似た気持ちで、ざくざくと歩を進めていると、いつの間にか背後の足音が止まっているのに気づいた。

「胡桃ちゃん？」

「…違う」

「え？」

「今度の人は違うの」

「何が？」

「いつもは顔だけ見て、この人いいなあって思つてたけど、今度の人は違うの」

胡桃ちゃんは俯いており、表情が見えない。いつもどこか様子が違つっていた。

「何が？」

「……その人ね、何だか、哀しそうな目の人だったの。その瞳が印象的で、目が離せなかつた。いつもみたいに、ただ好きつていうだけじゃなくて、守つてあげたいって初めて思ったの」

だから協力してほしい、そう告げる胡桃ちゃんの瞳は今まで見たことがない意志の強い女の目をしていた。

最恐の姉御＝島谷雪乃

「それで、協力するって言ひやがつたのぉー?」

「……はー」

「『まつかじやないのー!』?」

「……すみません」

逸姫は雪乃ちゃんの剣幕に思わず謝っていた。

雪乃ちゃんは胡桃ちゃんと同じく同僚で
お店では胡桃ちゃんも含めて3人ぐるみで仲がいい。
お店に入ったときからそれは変わらない。
私たち3人は店で一番の仲良しで、
いつも一緒にいる。

この3人の中でもとりわけしつかりしているのが雪乃ちゃんなのだ。

「で、でもね? 今回は本当にいつもと違つて真剣だったのよー。」

「それでくべでもない男だつたらビックリなのよー。」

「そ、そしたら、諦めさせる」

「あの胡桃がそう易々と諦めるわけないじゃん! 熱が冷めるまでは、
とにかく突き進むタイプなんだからー。」

……そうでした。

胡桃ちゃんは見た目ふわふわしている割に、中身は頑固なのだ。

「でも、いつも通りなら、熱が冷めるのも早いし、平氣じやない？」

途端、雪乃ちゃんの鋭い眼光とぶち当たる。

「あんた……それ本氣で言つてゐる？」

「ひいいいいいいい！」

地獄の底から聞こえてきそうな重低音に思わず震震とする。

「本氣ならいいわよ？その代わり私は一切関与しないから」

「ゆ、雪乃さまあああああ！それだけは！」勘弁を！

そんなの怖すぎるひひひひ！

雪乃ちゃんなしで胡桃ちゃんの暴走を止めるなんて、不可能だ！
地獄絵図にしかならない！

「ほら、みんな。あんただって、本氣で思つてない癖に」

「うぐう、」

いや、決して本氣で思つてないわけじゃないんだよ？

だが、胡桃ちゃんがいつになく真剣だったから大丈夫かなつてつい…

「あんたが余計なことしたせいで、今回は止めるの苦労するわよー

？」

「…………『じめんなさい』」

思わず、しょぼん、とする。

「……まあ、過ぎた」と言つてもしょうがないわね。対策を考えましょうか」

そして、ぽんぽん、と私の頭を撫でる。

「雪乃ちゃん……」

雪乃ちゃんつてこういう人だ。

基本さばさばしていて、必要以上に怒つたりしない。
相手が非を認めれば、それ以後そのことについては一切口に出したりしないのだ。

また、困っている人を見ると放つておけない姉御肌でもある。

「雪乃ちゃん！」

「わあー何よー!?

勢いよく抱きつき、お腹に頬ずりする。

「大好きー！」

「……はいはい」

雪乃ちゃんは溜息まじりだ。

だが、私の心はほかほかしていた。

私は本当に友達に恵まれている。

私たちのはおしゃべりもそこそこ縫製の作業に入る。

なんといっても今の時期は仕事が多い。

今年の冬は一段と寒くて、冬物を頼む人が急増したのだ。

そして今日は胡桃ちゃんは休日そのため
私と雪乃ちゃんの2人で縫製作業に取りかかる。

「そういえば……ねえ、逸姫」

「うん？」

忙しいため

作業を止めずに返事だけ返す。

「まだ、彼から連絡ないの？」

思わず手が止まる。

「……うん」

「やつか……、じめん」

雪乃ちやんを見ると申し訳なさそうに顔をしかめていた。

私は黙つて、首を振る。

雪乃ちやんが悪いわけではないのだから。

逸姫の婚約者だった神瀬蓮也は2年前、突然姿を消してしまった。

誰にも、何も、言わざ。

逸姫はすぐに捜索願いを出した。

だが、一向に見つかる気配はない。

何か事件に巻き込まれたのではないか、と逸姫は心配でたまらなかつた。

蓮也が死んでいたらビックリよう、と最悪の考えばかりがすっと頭を支配していた。

だが、1か月経つても、3か月経つても、何の手掛かりも出ない。

その辺りから、警察は事件性を疑い始めた。

自分で姿を消したのではないか、と云ひるのである。

そんな筈はない、と逸姫は憤った。

けれど……良く良く考えてみると、確かに、蓮やは消える前に様子がおかしかったことにその時初めて気がついた。

それから、2年の月日が経っている。

未だ、蓮やは見つかっていない。

「「めん、逸姫。思に出させて……」

「そんな、もう2年も前のことなんだし。気にしないよ」

「アリ？……あー来たわよ！胡桃が！」

振り向くといつの中にか胡桃ちゃんが出入口に立っていた。

それも、相当機嫌が良さそうだ。

今日は休日のはずなのに、ビーッしたんだアリヘ。

「つふふふふふー」

「…何よ、気持ち悪いわねえ」

雪乃ちゃんが、思わずと黙った感じで顔を顰める。

だが、胡桃ちゃんは気にせず続けた。

「聞いて、聞いて！今田の人とデートあることになつたんだあー！」

「「はああああああああああああー？」」

私も雪乃ちゃんも驚きにあんぐりと口を開ける。

なんだ！

その急展開は！

「早すぎるでしょー一体いつ、ビーッで会ったのよー？」

「わつや、道端で悶然。もづ、『れは運命よな?』

胡桃ちゃんは既に田がハートだ。

「どひして、いきなりそんな話になつたのよー?」

それは私も聞きたい。

「えー? それは、ひ・み・つ」

今、確實に語尾にハートマークがついていた。
……そして、雪乃ちゃんの眉間に青白い怒りのマークがはつきつ
と見える。

「どひで念ひの?」

「ん? わいの喫茶店だよ」

ふーん、と雪乃ちゃんは考え込んだ。
そしてじゅりくして

ヒヒヒと笑うと朗らかに告げた。

「わう。そのテート、私たちもついて行くから

「ええええええ! ?」

今度は、私と胡桃ちゃんが驚き工田を開く。

「何でわづーせつかくふたつわづのテートなの? こー! こー! こー! こー! こー!

私も何故と問いたい。

「あんた一人じゃ心配だから私たちがついて行つてあげるんじゃない」

「わ、私も？」

小声でぼそりと呟くと雪乃けやんがゆっくりと振り向いた。

「いやなの？」

「……いえ、是非行かせて下さー」

今、雪乃ちゃんの背後に吹雪が見えたのは決して私だけじゃない筈だ。

いけすかない男＝東條奏

そして、今、喫茶店にも猛吹雪が吹いていた。

(きまざい……)

喫茶店の一角だけ
奇妙な静けさに包まれている。

まるで吹雪で耳を塞がれたような
冷たい静かな時間が流れている。

(きまざすぎる……)

逸姫はあまりの居心地の悪さに
ひたすら田の前のコップを見つめた。

遡ること40分程前。

胡桃ちゃんについてきた私たちは
喫茶店に腰を落ち着け、胡桃ちゃんの
意中の相手が来るのを待っていた。

その間、何度も雪乃ちゃんと胡桃ちゃんとの間で
言い争いが続いたが、
結果的には胡桃ちゃんが折れた。

そうした末にやっと御対面した

胡桃ちゃんの恋焦がれる相手（すぐに他人に戻る可能性大だが）

その人は東條奏と名乗った。

見た目は驚くことに

……普通だった。

失礼かもしれないが、

だが、本当に平凡な容姿の人だった。

今までの胡桃ちゃんのタイプとは正反対。

これには雪乃ちゃんも私も驚いた。

もっと派手で、軽い、美形の男を想像していたのだ。

それに比べて今回はあまりに地味な顔立ちと言わざるをえない。

しかし、東條奏は平凡な中にも上品さが漂つており、貴族の子息であることを伺わせる顔立ちをしていた。

また不思議と目を惹く雰囲気を持つている。

物悲しいような、柔和なような、それでいて壊れそうな…そして、なんとも言えない妖しい色気を持つた男だった。

私と雪乃ちゃんは始めぽかんとしていたが、

胡桃ちゃんは早速目をハートにして話しかけていた。

真っ赤な声で一生懸命に胡桃ちゃんが話すのを

東條奏は穏やかに聞いていた。

一見すると微笑ましいカップルの光景。

だが、何故だろ？

逸姫は先程から冷や汗が止まらなかつた。

時折、言葉に言い表わせない鋭さで逸姫を射抜くように見てくる気がしてならないのだ。

東條奏と会つたのはこれが初めての筈なのに。

何故そんな目で私を見るのか。

そして、逸姫自身、初めて会つた気がしないのは、どうしたのか。

逸姫の頭の中で警鐘が鳴り出したとき……

ばしゃつ、と

雪乃ちゃんがコップの水を東條泰にぶつかれる音が辺りに響いた。

車輪の音

そうして振り出しに戻る。

今、あたり一面氷を張ったよつこじーん、と静まり返っている。

(あ、きまざい……)

ずっとと考え事をしており、3人の会話を聞いていなかつた逸姫はきまざに顔を伏せるしかない。

(なに！？なにが起つたの！？)

雪乃ちゃんは顔を真つ赤にして怒つており、
胡桃ちゃんは呆然とした顔をしてくる。

東條奏はといえば、

これ以上ない程の冷たい眼差しで口を開いた。

「……あのわあ、これ高いんだけど？」

そう言って胸元の服を引っ張るよつこじーんを見る。

「引っかけたのは水よー。そんなことより胡桃に謝りなさいよー。」

「何で、僕が謝らないといけないの？」

東條奏は、付を合つてらんない、とばかりに田線を余所にやる。

その態度にますます雪乃ちゃんは激昂する。

「何が胡桃は頭の悪い尻軽女よー？失礼じゃない！」

そ、そんなことを言つたのか。

この男は、若干話についていけず、呆然としていると。

「……失礼？」

東條奏の口元が嘲笑に歪んだ。

「事実を言つたら失礼になるのか？」

「んな…………つづー！」

雪乃ちゃんは怒りで顔を染め、東條奏に掴みかかるつとした。
しかし、

「……やめて」

静かに響いたその声に雪乃ちゃんは動きを止める。
逸姫も声の主に顔を向けた。

胡桃ちやんは哀しそうな笑みを浮かべて、雪乃ちやんを見た。

「いいの。事実だし」

「な、なに言つて」

「東條わん」

胡桃ちやんは雪乃ちやんの声を遮り、静かに話しかけた。

「今日はこれで失礼しますね……」

対して東條奏は興味のなさそうな顔で返事はおろか身動き一つしなかつた。

「雪乃ちやん、逸姫ちやん、いい」

胡桃ちやんは音も立てずに立ち上がると
にっこり笑つて

先に出口へと向かい始めた。

「ぐ、ぐるみ」

慌てて雪乃ちやんが後を追つ。

逸姫は展開の早さについて行けず、
一瞬ぼうっとしたが、すぐに我に返ると
2人を追いかけようと足を踏み出した

が、強い力で腕をひかれ、危うく後ろに倒れそうになる。

なんとかその場に踏みとどまると、
腕の先へと視線を向けた。

「な、なんですか？」

そこには最初の時のように鋭い瞳で逸姫を射抜く東條奏がいた。

逸姫はあっと息を飲み、

吸い込まれるようにそのまま瞳から田が離せなくなつた。

それから何秒立つたろう。

恐ろしく時間が過ぎたような一瞬後。

東條奏がようやく口を開いた。

「……逸姫さん、だつたよね？」

「そ、そりですが……」

そこでようやく東條奏は満面の笑みを見せた。

その笑みは妖しい美しさを湛えていて、逸姫は知らず田を奪われる。

「また、会えないかな？」

遠くでカラカラと回る馬車の音が聞こえた。

なんだつたんだろう、あの人は。

どこかで会つたことがあるような気がするのに、
濃い霧に阻まれて答えに辿り着くことができない。

それが逸姫にはもどかしい。

頭の奥では思い出してはいけないと警鐘を鳴らしていくように、
反対に今思い出さなければ後悔するような気もある。

何か重要な鍵をあの人があ握つていて思えてならない。

もしかして、逸姫自身が記憶のない子どもの頃に会つたことがある
のだろうか？

だが、もしそうだとしたら、あの人は何故そのことを何も言わない
のか。

もしや…私が記憶のないことを知つていて？

純粹に、知りたい、と逸姫は思った。

過去の自分を東條奏が知つているのなら知りたい、と。

今までずつと記憶のないことを不思議に思つていた。
だけど、蓮也は思い出す必要はない、と、

逸姫が思い出せうとするのと、何を隠すか隠さないかで、殊更嫌がつた。

それに逸姫自身、

何故か思い出してはいけないような気がしていた。

だから、過去の自分に對して

何の興味もなかつた。

蓮也がいれば、ただそれだけで良かつたから。

でも、今、純粹な好奇心が逸姫の中で生まれていた。

何故、記憶のないまま、12歳のときから孤児院へいたのか。
12歳まではどうやって暮らしていたのか。

パパは？ママはどうしたのか？

東條奏に会えば、そのすべてがわかるだろつか？

ん?と振り返ると雪乃ちゃんが顔を曇らせて立っていた。

「逸姫、大丈夫?この前から何だかぼーっとしてるけど」

逸姫は心とは裏腹に、何でもない、と笑つ。

「そう?…ならいいんだけど……胡桃もあれから様子がおかしいし」

不安げに雪乃ちゃんは目を伏せる。

「胡桃ちゃん、あれからどう?」

「あんなこと言われたのに全然諦める気ないみたい」

そうなのか。珍しい。

「胡桃つて惚れっぽいけど、切り替え早いでしょ?。でも今回はちよつと違つみたい。逸姫の言ひとおり、今回は本気なのかも」

あんな男じやなきや大歓迎なんだけど、とぼやく雪乃ちゃんと笑いながら店を出る。

「笑い事じゃないわよ、逸姫」

「『めん、『めん。でも雪乃ちゃんがついてたら、変なことにはならないんじやない?」

それもそうね、と胡桃ちゃんを叱る気満々の雪乃ちゃんが言つ。

実際、胡桃ちゃんが相手の男に貢いだと言つても本当に少額で、高額なものを貢ぐ前に雪乃ちゃんが事前に全部防いでいた。

ただ、それからしばらく胡桃ちゃんを宥めるのが大変なのだ。

だから、今回もそれぐらいで、多分大丈夫だろう。

最後には雪乃も逸姫も軽い足取りで家路に着いた。

再びの轍

「ほんにちは」

カラーン、という涼しげな音と共に
さわやかな笑顔を浮かべた男 東條奏が目の前にいた。

「……いらっしゃいます」

店番をしていた逸姫は常套句を口にするしかない。

心中では、

よく店に来れるな、とある意味感心していた。

「追加でもう一着タキシードを仕立てたいんだけど

その言葉に逸姫は、頭を下げ、礼を述べる。

この服飾店“ル ムーラン ルージュ（赤い風車）”では
東條奏の言つとおり、仕立て屋も兼ねており、男性もよく訪れる。

正式な礼服の燕尾服やイブニングドレス、準礼服のタキシード、ガ
ウンなど注文は様々だ。

だが、大概は主人自ら注文に来る」とはあまりない。
ほとんどが下僕などだ。

自分と背丈の同じ使用人を来させて、採寸にも来ない貴族も多い程だ。

……といふことは東條奏は貴族ではないのだろうか？

この前も自ら注文に来ていたようだし。

「採寸はいがが致しましようか？」

「今、お願ひできるかな？」

「畏まりました」

採寸のための部屋へ案内すると、「失礼します」と
断りを入れて採寸を始める。

東條奏は大人しくそれに従つた。

しばらくゆつたりとした時間が流れる。

逸姫は仕事に徹し、順序よく採寸していく。

それをしばらく東條奏は静かに見ていたが、やがて口火を切つた。

「ねえ、逸姫さん」

「…何でしょう？」

緊張しつつ、東條奏を見上げると、

あの時と同じ妖美な笑みで逸姫を見ていた。

その笑みに逸姫は、心底つとまる。

「！」の後、お茶しない？」

…………ただのナンパ男かよ。

逸姫は心のなかで溜息を吐く。

「お茶しない？」という言葉は今までうんざりする程聞かされたナンパ言葉と寸分も変わらない。

いまだき流行んねーよ、とあくまでも胸の奥底で悪態を吐く。

この男が逸姫の昔のことを見つけていたのはただの勘違いだったのか。

「仕事がありますので」

「もううるさい、仕事の後でいいから。何時に終わるの？」

妖しく思えた笑みも今はただ、にやにやしているようにしか見えない。

あの微笑は目の錯覚だったのか。

完全に軽いナンパ男だ。

胡桃ちゃんにもこんな感じで声をかけたんじゃないだろうか。
それであつたり自分に乗り換えるとは。

失望や軽い怒りを覚えたものの、仕事中の手前、なんと答えたものか迷った。

「来てくれたらなんでも好きな物買つてあげるよ

「いりません」

「こいつ、私を愛人にもするつもり?」

怒りがふつふつと湧いてくる。

「ねえ、少しくらいいいじゃない。何か用事でもあるの?」

「(口)はやんわり断るしかない、と曖昧に答えておく。

「何の用事? その用事のあとでもいいよ」

しつけー。

嫌がってるんだから察しろよ、と胸中で顔をしかめた。

だが、決して面には出さない。

就業時間中の今は相手はあくまでも大事なお客様だ。
逸姫は曖昧な笑顔で対応した。

しかし、心中では

セービングやつけて断りつか、と考えを巡らせてくると…

「ふうん。自分の過去が知りたくないの？」

いきなり投げられた爆弾に逸姫は目を見開く。

それを見て、東條奏は口角を釣り上げた。

「ねえ、お茶しようよ」

その三日月に細められた瞳は、靈感的なことがね色で輝いていた。

それを見て思い出す。

やつこえば…

蓮也が失踪したのもこんな色合いの葉が舞い散る秋だった

と、逸姫はぼんやりと思った。

再びの轍（後書き）

次から、しばらく過去編です。
行きあたりばつたりですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2929o/>

幼馴染

2011年1月28日14時29分発行